

登山学校レポート（第10回 冬山講習）

氏名（南家弘毅）・所属会（福岡勤労者山岳会＝愛称・福岡アゼリア山の会）

日程：2/10（土）～2/11（日）

山域：伯耆大山

講習参加者

受講生（5名）：南家・川原・手島・安部・河野

講師（4名）：坂井・松山・山中・藤本

レポートテーマ

1 2回の冬山講習（第8回シミュレーション講習、第10回実践講習）を通じての感想

●テント入室前に5分超

伯耆大山で厳冬期登山を初めて味わって改めて実感したことは、装備の忘れ物、体力、天候の読み、ルートファインディング、進退判断など何か一つ間違えてしまえば簡単に遭難するのが冬山という、リスクの大きさだった。

南光河原駐車場から1時間あまりで元谷避難小屋に到着。まずはテント設営だ。冬山テント泊は35年ぶりで、何から手を付けるかすっかり忘れていた。一緒にテント住人になる講師お二人のテン場選定（風が極力当たらない）にうなずき、1時間を超す入念な整地作業をまねた。スコップが大活躍というか不可欠。水用の雪ブロックはゴミ袋を満たす量があれば十分。

テント設営後はわかんで一定の距離を歩いて練習した。危険箇所ではメンバーが下から上がる際の安全確保が必要となる、木の枝や岩がない中でのロープ出しの確保技術を学んだ。まず、スタンディング・アックスピレイが支点として脆弱なことを講師の実演で知る。代わりに、ピッケルのヘッド穴にスリングを通しておいてヘッド部分を深さ40cm以上埋め、シャフトも雪面方向と平行に沈める方法を詳しく習った。ポイントは、シャフトをヘッド以上に深く埋めてやること。メンバーが滑落した衝撃でピッケルが外れたら、自分も一緒に落ちていくだけに、支点構築は実践して身に付ける必要性を感じた。

講習を終えてテント入り。テント入室前、講師がウェアやザックの雪落としに5分あまり時間をかけ、ザックのタグの間まで雪の破片を雪ブラシで丁寧に払う作業に見入ってしまった。私の雪山経験は20代。みんなテントに早く入って落ち着いたがることもあり、ここまで細かく落とす先輩を見たことがなかったからだ。滞在時間が長いテント内を快適に過ごすには、講師のやり方がベターと思った。

実は入山ひと月前から片膝に違和感があり、整形外科を受診していた。歩荷訓練どころか脚に極力負荷をかけない過ごし方をしてきたつけが、テント内で出かかった。九州脊梁の縦走山行のテン場で周りに大迷惑をかけた、脚のつりだ。両脚をテント隅に向けて伸ばしておかないと、とたんに内股がビクンとつりかける。原因は一に筋力低下、二に冷え、三に水分補給不足とみた。ガストーブ正面に体を向けられない不安定な体勢のため、鍋持ちを免除

していただき申し訳なかった。

就寝時、脚が2度つったほか、足先の冷えが強烈で半分ほどしか眠れなかった。自分の低温耐性がすっかり弱っていることを自覚した。象足にカイロを貼ると冷たくなると講師が教えてくれたので、次から試してみる。寝るときにモバイルバッテリーをザックの雨蓋に入れたままにしていたら、翌日、スマホ充電が全くできなくなっていた。「バッテリーも懐に入れて寝るといいよ」と講師がアドバイス。冬山の常識、ちゃんと身に付けねば。

●ガスの中、パーティー間に距離

2日目は、テントを張ったままピークアタック。一晩で10cm近く新雪が積もっており、わかんを装着する。夏山登山道に当たるまでは、主に先行者のトレースをたどりながらステップを刻んでいった。軽いラッセルでも先頭者には負荷がかかる。スローペースになっているのを懸念した講師から、「先頭は疲れたら次の人にすぐ交代！」と何度も声が飛んだ。途中、衣類調整以外で小休止を取りたいと話す仲間もいた。先頭がルートの外に出て交代し、最後尾につくまでの間に休みを取るというフォーメーションを、出発時に確認しておくべきだった。

夏山登山道に入ると登山者が急に増えた。弥山尾根に取り付いている人たちが豆粒の大きさで見える。樹林限界を越え、頂上小屋から上はガスが濃くなっていた。視界は20mほどか。強風にもさらされる。先頭グループと2番手グループの私たちとの距離が開いてしまった。講師が「先に行きすぎてるよ！ 後ろを見て歩いて」と先頭に声をかけた。私たちが先頭に向かって「離れてるのでペースを落として」と伝えるべきところだった。ルートは、他の登山者のステップがあるから止まらず登れたけれど、ガスの中の大山上部のルートファインディングが相当困難なことは想像できた。

山頂(弥山)に到着。小中学生時代、いとこたちがいる米子市にはよく遊びに来て山名に馴染みがあった大山だけに、初登頂が素直にうれしかった。

この日、わかんとアイゼンの着脱に私は手間取って、メンバーを何分も待たせてしまったことは大きな反省材料だ。

今回は参加人数など諸事情があったとは思いますが、積雪量の豊富な雪山に来ないとできないビーコンを使った雪崩搜索訓練と弱層テストが、講習メニューに入っていたらよかったと思った。

2 登山学校講習の全過程を終了しての感想

5月のロープワーク基礎に始まり、いきなり鬼城のハードな実践、クライミングゲレンデ、沢登り、地図読み縦走、本格的なクライミングにチャレンジ、冬山のシミュレーション訓練、冬山本番のフィナーレ。10カ月分のすばらしいカリキュラムを用意してくださり、細かなことまで丁寧に繰り返し教えてくださった全講師の方々に、深く感謝いたします。

コンスタントに山に登っていた大学時代は、いっばしの中級以上の登山者のつもりでした。しかし、何十年というブランクとともに技術も知識も体や頭からほとんど剥がれ落ちて

いたことを痛感する過程でもあった。それだけに、自分は覚えることが山ほどある未熟な初級者なのだと思い謙虚に学んだ。全カリキュラムに参加しての卒業となったけれど、10カ月間教わったことを「体験」で終わらせてはいけなくて強く考えている。教わったのはあくまで登山の一通りの概要であって、一つ一つの技術と知識は身に付けなければ現場では役に立たない。学んだ技術や知識が生かせる山行にどんどん行かなくては駄目だろう。ロープの結び方やマルチピッチクライミングのシステムが曖昧になったと感じたら、勉強のし直しだ。

教えていただいた技術や知識が、山行の安全度を必ず高めるのにつながっていることを決して忘れないようにしたい。

全く付き合いのなかったよその山岳会の受講生や講師と1年近くも交流できたのは、登山学校の大きな魅力だった。山体力を維持するため部活練習のように毎週山行に出かける人、冬山入山の1週間以上前にパッキングしてみてもさらなる工夫ができないか準備する人など、登山というスポーツに正面からまじめに取り組む姿勢にハッとさせられた。シンプルに言えば、個性的な山仲間が登山学校を通してできたことが素直にうれしいです。

3 今後、あなたが所属会において担うべき役割について

登山学校の“アゼリア山の会版”として、登山技術のステップアップを目指す会員をサポートする「アゼリア塾」の参加者に、アシスタント的な役割をもらって関わっていききたい。教えようとする中で自分の学びの浅さに気づいて勉強し直す機会にもなるだろうし、アゼリア山の会で伝えていないことを「登山学校ではこんなふうに教えていた」と発信できるかもしれないからだ。

4 県連登山学校に対する要望等

2014年度から（コロナ禍の2020年度を除いて）続いてきた登山学校が、24年度はお休みになる見通しというのは残念です。25年度からの再開を切望します。

現在、山岳会に所属し活動している人たちの中には、登山学校の受講生になることで登山の面白さや奥深さに気づけた私のような人間がきっといるはずだ。面白いと思ったことは人に伝えたくなるもの。登山学校の面白さの裏に山の安全度アップが貼りついている点がミソで、登山学校の受講者が広がることは事故ゼロ登山をする人間が増えることにつながるからです。

福岡アゼリア山の会から25年度の受講生として誰を推したいか、今から案じておきます。